

『金蔵論』と日本説話文学

本井 牧子 (筑波大学助教)

はじめに

日本における『金蔵論』研究は、その始発点から日本の説話文学と密接な関わりを有していた。歴史の中に埋没してしまっていた『金蔵論』という書物が、再びわれわれの前に姿を現し、その存在が注目されることになったのも、その紙背に『日本国善悪現報靈異記』(以下『靈異記』)という、現存最古の説話集が書写されていたからに他ならないからである。

この『靈異記』古写本は奈良県にある法相宗大本山興福寺で発見されたもので、現在は国宝に指定されている。この発見については、1934年1月20日付『中外日報』で報じられており、その2ヶ月後には影印が公刊された¹⁾。

1) 佐伯良謙編『日本国現報善悪靈異記』上(1934年3月、便利堂)、解説は大屋徳城氏による。

この影印の解説においてはじめて、その背面に『金蔵論』が書写されていることが言及されたのである。すなわち、ここが『金蔵論』研究の出発点であった。

その後、大谷大学図書館に所蔵される法隆寺旧蔵本(以下「谷大本」)の存在も広く認知されるようになり、以後、『金蔵論』は興福寺本(巻六前欠)と谷大本(巻一・二)によって研究されていくことになる。それは主に日本説話文学との関わりを究明しようとするものであった。

興福寺本において表裏に書写されていた『靈異記』との関連に関しては、当然早くから注目されたものの、結局「～縁」という説話標題の形式が共通することが指摘されるにとどまった²⁾。特に深い関連が指摘されたのは、日本最大の説話集である『今昔物語集』(『今昔』)であった。『金蔵論』は『今昔』の出典のひとつとして広く認められるにいたった。

ところが、興福寺本と谷大本をあわせても、残存している分量は、全七巻、もしくは九巻といわれる『金蔵論』のうちの三巻分にも満たない。この資料的な制約が、その後の『金蔵論』研究の停滞をもたらしていた。

そのような状況のなか、荒見泰史氏や方廣鋳氏によって敦煌写本中にも『金蔵論』が残っていることが指摘された³⁾。これを契機として数点の『金蔵論』敦煌本が確認されることとなり、これまで不明であった巻五の本文が判明することとなった。そして韓国では、南權熙、崔鉉植両氏によって、

2) 稿者は『靈異記』についても、『金蔵論』が参照された可能性を考えている。これについては機会をあらためて論じたい。

3) 荒見泰史「敦煌の故事綱要本」(『漢語史学報專輯(総第三輯) 姜亮夫 蒋礼鸿 郭在貽先生紀念文集』、2003年5月)、「敦煌文学与日本説話文学—新發現北京本《衆經要集金蔵論》的価値」(『仏教文学研究論集』復旦大学出版社、2004年)、「中国国家図書館蔵敦煌写本、北京8407(鳥16)『衆經要集金蔵論』校録」(『西北出土文献研究』3、2006年2月)、「敦煌文学与日本説話文学—新發現北京本《衆經要集金蔵論》的価値」(『仏教文学研究論集』復旦大学出版社、2004年)。

韓国釜山の梵魚寺に所蔵される『金藏論』の版本（梵魚寺本）が紹介されていたのである⁴⁾。これらの発見は、日本だけでなく、敦煌や韓国でも『金藏論』が広く読まれていたことを示すものである。特に、韓国では出版されていたということは、この点をさらに裏付けるものであろう。

また、梵魚寺本には、巻頭に目次が付されていることも、『金藏論』研究を大きく前進させるものである。これまでは、散逸部分に関しては、逸文などからその構成を推測するしかなかったが、これによって全体の構成が明らかになったのである。

敦煌本・梵魚寺本出現は、『金藏論』研究に新たな地平を開くものである。

1. 『金藏論』巻二の問題—梵魚寺本と谷大本—

ところで、梵魚寺本は谷大本と同じく、巻一、二が残存しているのだが、巻二の本文が谷大本と全く異なるものである。二本を対照して示した【表1】。『法苑珠林』に同文的同話がある場合は「珠林」の欄に、『義楚六帖』に引用がある場合は「義楚」の欄に○印で示した。

実は、谷大本巻二については、説話の本文系統や形式などに種々の問題があり、本来の『金藏論』本文とは全く別のものが竄入した可能性を指摘したことがあった⁵⁾。その問題点というのは以下のようなものである。①他巻は「一縁」という題の章に分かれているのに対し、谷大本巻二にはこの章分けがない。②他巻には章の冒頭にその章の内容に関する短い文章が付

4) 南權熙『高麗時代記録文化研究』(古印刷博物館、2002年)、崔鉉植「『金藏論』について」(『仏教学研究』第9号、2004年12月)。

5) 拙論①「大谷大学蔵『衆経要集金藏論』考一卷第二の問題を中心に」(『大谷学報』85巻3号、2006年7月)

されていることがあるが(仮に「述意部」と呼ぶ)、谷大本巻二にはこれがない。③他巻には、『法苑珠林』との同文的同話が多いのに対し、谷大本巻二は全話が『経律異相』との同文的同話で、『法苑珠林』との同文性が希薄である。④他巻からは、宋の義楚の撰になる『義楚六帖』に多くの記事が引用されているのに対し、谷大本巻二からの引用は皆無である。⑤谷大本巻二には他巻と重複する説話が収録されているといった問題点である。

ここで、梵魚寺本巻二を検討すると、これらの問題は全て解消される。梵魚寺本巻二は①「一縁」という章題、②述意部をもち、③『法苑珠林』との同文的同話を多く収め、④『義楚六帖』に引かれる記事に対応する説話をもつ。そして、⑤他巻と重複する説話は皆無である。梵魚寺本の巻二こそが、『金藏論』本来の巻二の本文を伝えるものであることについては、もはや疑いがないであろう。

なお、谷大本巻二に関しては、『経律異相』の抄出本が、ある時点で竄入したものと現時点では考えている。『経律異相』を抄出する例があることは、大坂河内長野の金剛寺から、『経律異相』を抄出したと考えられる一葉が発見されていることなどからも裏付けられよう⁶⁾。

こうして、現時点でみることができる『金藏論』本文は、巻一(谷大・梵魚寺本)、巻二(梵魚寺本)、巻五(敦煌本)、巻六(敦煌本・興福寺本)の計四巻となった。『金藏論』に関する研究はあらたな局面を迎えたといってよい。次章以下、これらの本文をもとに、『金藏論』と日本説話文学との関連の一端として、主に『今昔』との関わりについて考察したい。

6) 落合俊典氏のご教示による。金剛寺聖経の調査において確認された。

2. 『金蔵論』と『今昔物語集』

日本最大の説話集として知られる『今昔』は、天竺(インド)、震旦(中国)、本朝(日本)という三部構成をもつ。『金蔵論』は仏典から種々の譬喩因縁譚を抄出して集成しているので、天竺の説話の宝庫といってよい。それらの天竺説話を『今昔』天竺部が和文化して利用しているということは、今日定説となっている。これまで、『金蔵論』を全面的な出典とする話が六話、部分的に参照されている話が一話指摘されていたが⁷⁾、梵魚寺本によって判明した巻二、および敦煌本によって判明した巻五にも、『今昔』と本文が非常に近似したものが含まれていることが確認された。そこで、まずは『今昔』と対応する『金蔵論』の説話を一覧にして示す【表2】。梵魚寺本と敦煌本によりあらたに判明したものは太字で示した。△印は部分的に一致すると考えられるものである。『法苑珠林』に同文的同話がある場合は「法苑珠林」欄に◎を、完全に同文ではないが同話がある場合は○を付して示した。

『金蔵論』を出典とする話数は、実に十七話にのぼる。『金蔵論』は『法苑珠林』と同文的同話をもつことが多いため、かつては『法苑珠林』が出典のひとつと考えられていた。しかし、【表2】をみると、『金蔵論』に該当話があり、『法苑珠林』にない場合がみられる。敦煌本や梵魚寺本によってあらたに判明した説話にも、『法苑珠林』に該当話がみられないものがあることから考えても、『今昔』編者が参照したのは『法苑珠林』ではなく、『金蔵論』であると考えてよいであろう。『法苑珠林』は『今昔』の出典としての位置から姿を消すこととなる。

ここで、『今昔』が『金蔵論』を利用している様子を具体的にみてみたい。

7) 今野達校注 新日本古典文学大系『今昔物語集』一「出典考証の栞」(1999年、岩波書店)。

『今昔』卷二 曇摩美長者奴富那奇語第(四十)は『金藏論』富那奇過去罵比丘作奴緣(二 罵詈緣3 ④)を利用している。この話は、過去に比丘を罵った悪因と、荒廃した寺を修理したという善因とにより、婢の子どもに生まれながらも、後に出家して得道した富那奇の話である。『金藏論』梵魚寺本と『今昔』とを対照して示す【表3】。

『今昔』と『金藏論』との親近性は一目瞭然であろう。『今昔』は『金藏論』をほぼそのまま訓みくださうな形で、この説話を和文化しているのである。ここで特に注目したいのが、長者とその長男の名前である。『今昔』、『金藏論』ともにその名を「曇摩美」「美那」とする。ところが、原抛の『賢愚経』では、「曇摩羨<此言法軍>」「羨那<此言軍也>」となっているのである⁸⁾。これらは梵語Dharmasena(法軍)、Sena(軍)の音写であるから、『賢愚経』の「曇摩羨」「羨那」が正しく、『金藏論』は「羨」を「美」と誤って伝えていることになるが、『今昔』はそれを踏襲しているのである。この例は『今昔』が『金藏論』にもとづいたことを強く裏付けるものといえよう。

ただし、『今昔』が『金藏論』を和文化する際に、若干のずれが生じている点も注意が必要である。なかでも看過できないのは、『金藏論』では悪因と悪果が対応しているのに対し、『今昔』ではその対応がみられないという点である。『金藏論』によれば、富那奇は過去世において、羅漢の比丘を「今此比丘、如奴無異」と罵っており、ここで比丘を「奴」と罵ったことが、現世で富那奇が婢の子(奴)と生まれることと対応している。これは仏の「由罵聖人、比丘爲奴、五百世中、常作奴使」ということばからも明らかである。しかしながら、『今昔』においては、「故無クシテ罵詈シキ」とあるだけで、「奴」という要素が欠落しているために、因と果の対応が不明瞭になってしまっている。あるいは『今昔』編者が『金藏論』の「如奴無異」を「故

8) 『賢愚経』卷六富那奇縁品第二十九。

無」と読み誤った結果とも考えられるが、因果の対応を読み取れなかったことの意味は小さくない。

このような『今昔』撰者の無理解とも思われるような省筆は、本話に限ったことではなく、同じく巻二に収められた王舎城燈指比丘語第(十二)にもみられる⁹⁾。富裕な長者の子として生まれた燈指が、両親の死後、財産を盗賊に奪われるなどして没落し、死体を運ぶことで渡世するという点に関して、仏によって次のような因縁が開示される。『金蔵論』燈指過去治塔得報縁(六 像縁16 ④)と『今昔』の該当部分は以下の通り【表4】。

『金蔵論』では、現在世で財産を略奪され、死体を運ぶことになった(「爲賊所劫、擔屍之報」)のは、過去世において、門を開けてくれなかった母親を「擧家擔屍、賊來劫耶」と罵ったことに対応する。ところが、『今昔』では、この言葉はなく、母を罵ったという悪しき行為によって(「母罵シ罪ニ依テ」)、現在の「貧キ苦」を受けているとしているのみである。

こういった差異を、『今昔』編者の意図的な省筆とみるか、本文の無理解によるとみるかについては、今後慎重な検討が必要であるが、譬喩因縁譚において重要な要素である因と果との対応を示す部分で、こういった差異がみられる点は、撰者の意識をさぐる上でも非常に重要である。このように、新たな『金蔵論』本文の出現は、『今昔』の出典研究に資するのみならず、『今昔』の構成や編纂意図の解明といった、より大きな問題への足がかりともなりえるものである。

9) 拙論②『『金蔵論』と『今昔物語集』—『金蔵論』敦煌本と『今昔物語集』巻二との関連を中心に—(『国語国文』77巻8号、2008年8月)で指摘した。

3. 『今昔物語集』による『金藏論』散逸説話復元の可能性

最後に、『今昔』によって『金藏論』の散逸説話が推定できる可能性を指摘しておきたい。今回、あらたに明らかになったものも含め、『金藏論』との密接な関連がうかがわれる説話は、『今昔』巻二に集中している。しかも、それがある程度のまとまりをもって収められているというのは、単なる偶然ではないであろう。このように考えると、『今昔』巻二には、『金藏論』散逸部分にもとづく説話が含まれている可能性がある。これについてはかつて拙論で考察したことがあるので¹⁰⁾、詳細はそちらにゆずり、ここでは簡単に『今昔』巻二 舍衛國金天比丘語第(八)、舍衛城寶天比丘語第(九)、舍衛城金財比丘語第(十)の連続する三話、および舍衛城叔離比丘尼語第(十三)が『金藏論』にもとづく可能性が高いことを指摘しておく。

『金藏論』現存部分をみる限り、『賢愚経』を出典とする説話が最も多いのだが、この四話も、すべて『賢愚経』を原拠とするものである¹¹⁾。また、このうち、舍衛國金天比丘語第(八)については、『法苑珠林』に同文的同話がみられることが指摘されている¹²⁾。『金藏論』には『法苑珠林』との同文的同話が多いことは先に述べた。したがって、『金藏論』にもこの『法苑珠林』所収の本文と近いものが収められていた可能性はきわめて高い。さらに、『今昔』のこの四話には、『金藏論』が多用する表現が散見する。【表5】に舍衛國金天比丘語第(八)の冒頭部分と、対応する『法苑珠林』、原拠の『賢愚経』とを対照して示す。---線を付して示したのがその定型表現である。

10) 前掲拙論②。

11) 『賢愚経』巻五 金天品第二十七、巻二 寶天因縁品第十一、巻二 金財因縁品第九、巻五 貧人夫婦疊施得現報品第二十五。

12) 前掲今野氏「出典考証の栞」は『法苑珠林』五十六 富貴六十三 引證二を出典とする。

--- 線にみられる表現は、『百縁経』などに頻出するもので、『金藏論』は原拠の經典の表現をこれらの『百縁経』に近い表現にあらためる傾向がある。ここでも、『法苑珠林』は、原拠である『賢愚経』の表現(www部)をあらためており、その表現は『今昔』にもほぼそのままとりこまれている。こういった表現は、他の三話にも散見する。『今昔』にみられるこの定型表現は、『金藏論』に由来するものと考えられるのである。

しかも、【表3】に示したとおり、この四話には含まれた舍衛城寶手比丘語第(十一)、王舍城燈指語第(十二)は『金藏論』を出典とするものである。このようにみえてくると、『今昔』巻二 舍衛國金天比丘語第(八)から舍衛城叔離比丘尼語第(十三)までの連続した六話は、『金藏論』にもとづくものである可能性が高い。逆にいえば、『賢愚経』を原拠とする(八)(九)(十)(十三)の四話の抄出本文が、『金藏論』に収められていたと考えられるのである。

さて、この四話には、『賢愚経』を原拠とし、定型表現をもつこと以外にも共通点がある。この四話はすべて、何かを布施する功德により、善報を得るという話なのである。ここで、梵魚寺本によってあらたに判明した章題のなかに、「布施縁第十二」が含まれていることが想起される。これらの四話は、『金藏論』布施縁第十二に収められていたのではないだろうか。『今昔』と『金藏論』本文、さらに梵魚寺本の目次をあわせよむことで、『金藏論』散逸部分を一部復元できる可能性として、これらの例を示しておきたい。

おわりに

北周に編まれた『金藏論』は、敦煌、韓国、日本へと伝わり、その地で

それぞれに受容された。東アジア各地における『金蔵論』享受を考えることは、東アジア文化の一端を担う法会、唱導、説話文学といった問題にもつながるものである。近年、各地で『金蔵論』への関心は高まりつつある。『金蔵論』を東アジア文化のなかに位置づけられる日もそう遠くないであろう。

キーワード

『金蔵論』、韓国版本、日本古写本、日本説話文学、『今昔物語集』、仏教類書

【表1】

卷	章	谷大本		章	梵魚寺本		法苑	義楚
			說話標題			說話標題		
一			序文			×		
			邪見縁第一目次・殺害縁第二目次			章題目次		
	邪見縁	述意	○	邪見縁	述意	○		
	第一	①	迦葉爲婢肆王說邪見過惡譬喩縁	第一	①	迦葉爲婢肆王說邪見過惡譬喩縁	○	○
		②	須達家老婢過去起邪見得惡報縁		②	須達家老婢過去起邪見得惡報縁	○	○
		③	邪見毀滅三寶得惡報縁		③	邪見毀滅三寶得惡報縁	○	○
	殺害縁	述意	○	殺害縁	述意	○		
	第二	①	釋種過去殺魚今爲流離王所滅縁	第二	①	釋種過去殺魚今爲流離王所滅縁	○	○
		②	迦留陀夷等過去殺羊得惡報縁		②	迦留陀夷等過去殺羊得惡報縁	○	○
		③	毘舍離三十二子過去牛殺得惡報縁		③	毘舍離三十二子過去牛殺得惡報縁	○	○
	④	微妙過去妬殺小婦子得惡報縁		④	微妙過去妬殺小婦子得惡報縁	○	○	
	⑤	宿大哆過去殺辟支佛得惡報縁		⑤	宿大哆過去殺辟支佛得惡報縁	○	○	
	⑥	師質過去斫辟支佛臂得惡報縁		⑥	師質過去斫辟支佛臂得惡報縁	○	○	
	⑦	駒那羅過去壞鹿眼得惡報縁		⑦	駒那羅過去壞鹿眼得惡報縁	○	○	
二			卷二目次			×		
	01		好信王發欲灌佛縁	罵詈縁	述意	○		
	02		國王夫人與一賢者共造寺縁	第三	①	罵精進持戒比丘得惡報縁	○	○
	03		以槁衣石布施人起塔生天縁		②	閻波羅過去罵比丘得惡報縁	○	○
	04		有人路行過見三受身行進縁		③	迦毘梨罵比丘獸頭得惡報縁	○	○
	05		優婆塞持戒鬼代花縁		④	富那奇過去罵比丘作奴得惡報縁	○	○
	06		難陀燃燈声聞神力不能滅縁		⑤	金剛醜女過去罵辟支佛得醜惡縁	○	○
	07		梵志諸施比丘說一偈能消縁	讒悔縁	述意	×		
	08		梵志遺學值五無反復縁	第四	①	月氏國王與三智人作親友縁		
	09		梵志兄弟四人同日命終縁		②	化生王子過去香塗塔讒悔縁	○	○
	10		長生太子欲親父怨後還得恩縁		③	佛說陀羅尼呪讒悔除罪縁		
	11		爲國王身治梵志罪縁	稱佛縁	述意	×		
	12		優填王造牛頭栴檀像縁	第五	①	國王殺父至心稱佛得觀地獄縁	○	○
	13		優填王造金像縁		②	五百釋子過去稱佛得生天縁	○	○
	14		波斯匿王造牛頭栴檀像縁		③	首菩薩過去稱佛得值佛縁	○	○
	15		阿那律等共佛跋提長者及其婦縁	觀像縁	述意	×		
	16		目連爲母造盆縁	第六	①	十方佛過去觀像讚歎成佛縁	○	○
	17		童子迦葉從尼所產一歲成道縁		②	四方佛過去觀像佛得成佛縁	○	○
	18		願足羅漢化餓鬼說法昔惡口縁		③	釋迦過去觀像成佛縁	○	○
	19		四比丘說苦遇佛得道縁	聽法縁	述意	×		
	20		比丘自恣受購得道縁	第七	①	衆生聽法得利益縁	○	○
	21		佛來宿習得道縁		②	月光詣寺聽經得生天縁	○	○
	22		比丘久病佛爲浴浣縁		③	鸚鵡聞四諦名得生天縁	○	○
	23		道人度狐師縁		④	蛤聽法得生天縁	○	○
	24		調達與佛結怨之始縁		⑤	鳥聞比丘誦經得生天縁	○	○
	25		暴志比丘尼前身爲繫婦縁	求法縁	述意	×		
				第八	①	女人至心求法得道縁	○	○
					②	釋迦過去爲八字捨身縁	○	○
					③	釋迦過去爲求法供養充身縁	○	○
					④	釋迦過去爲法剝皮爲紙縁	○	○

【表 2】

今昔物語集		金藏論				法苑珠林
卷		卷	緣			
一	22 鞞羅漢王子出家語	六	出家	⑤	鞞羅漢那一日出家得生天緣	◎
二	11 舍衛城寶手比丘語	五	塔	15	⑨ 寶手過去金錢着塔下得報緣	◎
	12 王舍城燈指比丘語	五	像	16	④ 燈指過去治像指得報緣	○
	15 須達長者蘇曼女生十卵語	五	塔	15	③ 蘇曼女十子過去治故塔得報緣	
	17 迦毘羅城金色長者語	五	塔	15	④ 金色過去治故塔得金色身緣	
	18 金地國王詣佛所語	五	塔	15	② 金地國王過去治故塔得報緣	
	19 阿那律得天眼語△	五	燈	18	④ 阿那律過去正佛前燈得天眼緣	◎
	28 流離王殺種種語△	一	殺害	02	① 釋種過去殺魚今爲瑠璃王所滅緣	
	29 舍衛國群賊殺迦留陀夷語	一	殺害	02	② 迦留陀夷等過去殺羊得惡報緣	◎
	30 波斯匿王殺毘舍離卅二子語	一	殺害	02	③ 毘舍離三十二子過去牛殺得惡報緣	◎
	31 微妙比丘尼語	一	殺害	02	④ 微妙過去妬殺小婦子得惡報緣	◎
	32 舍衛國大臣師質語	一	殺害	02	⑥ 師質過去斫辟支佛臂得惡報緣	○
	34 畜生具百頭語	二	罵詈	03	③ 迦毘梨罵比丘獸頭得報緣	◎
36 天竺遮羅長者子閻婆羅語	二	罵詈	03	② 閻婆羅過去罵比丘得惡報緣	◎	
37 滿足尊者至餓鬼界語	二	罵詈	03	① 罵精進持戒比丘得惡報緣	◎	
40 曇摩美長者奴富那奇語	二	罵詈	03	④ 富那奇過去罵比丘作奴緣		
三	19 須達家老婢得道語	一	邪見	01	② 須達家老婢過去起邪見得惡報緣	◎

【表 3】

金藏論	今昔物語集
昔佛在世時、放鉢國中、有一長者、名 <u>摩美</u> 。其家巨富、國中第一。有二頭兒、大名 <u>美那</u> 、小名勝軍。有一婢使、常看長者。婢生一男、字富那奇。	今昔、天竺 ^テ 放鉢國 ^{クニ} 云 ^ク 國有 ^リ 。其 ^ノ 國 ^ニ 一 ^ノ 長者有 ^リ 。名 ^ヲ 「 <u>摩美</u> 」云 ^フ 。家大 ^ニ 富 ^ク 國 ^中 第一 ^ノ 人也。二人 ^ノ 子有 ^リ 。兄 ^ヲ 「 <u>美那</u> 」云 ^フ 。弟 ^ヲ 「勝軍」云 ^フ 。又其 ^ノ 家 ^ニ 一 ^ノ 婢有 ^リ 。長者 ^ヲ 養 ^フ 、家業 ^ヲ 助 ^ケ 者也。其 ^ノ 婢、一 ^ノ 男子有 ^リ 。名 ^ヲ 富那奇 ^ト 云 ^フ 。
長者亡後、二兒分居。時富那奇、分囑大兄、爲兄營家。其家豐富、過踰於前。後求出家、兄即聽之。既出家已、得阿羅漢、三明六通、具八解脫。	而 ^レ 間、長者死 ^ス 。其 ^ノ 後、此 ^ノ 富那奇、二 ^ノ 子 ^中 、兄 ^ヲ 美那 ^ノ 屬 ^ス 。其 ^ノ 人、又家大 ^ニ 富 ^ク 父 ^ノ 長者 ^ヲ 勝 ^リ 。而 ^レ 富那奇、出家 ^ヲ 求 ^ム 心有 ^リ 、美那 ^ニ 此 ^ノ 事 ^ヲ 請 ^フ 。美那、此 ^ノ 聞 ^キ 出家 ^ヲ 許 ^ス 。富那奇、既 ^ニ 出家 ^{シテ} 道 ^ヲ 脩 ^メ 、終 ^ニ 羅漢果 ^ヲ 得 ^ル 。
後來勸兄、爲佛造堂、純以栴檀。其堂成已、勸兄請佛、及比丘僧。	其 ^ノ 後、美那 ^ノ 家 ^ニ 來 ^テ 勸 ^ム 云 ^フ 、「佛 ^ノ 御爲 ^シ 堂 ^ヲ 造 ^ル 」ト。美那、勸 ^ム 隨 ^テ 旃檀 ^ヲ 以 ^テ 堂 ^ヲ 造 ^ル 。富那奇、又勸 ^ム 云 ^フ 、「佛 ^ノ 及 ^ビ 比丘僧 ^ヲ 請 ^{シテ} 供養 ^シ 奉 ^レ 」ト。
兄即問言、「請佛之宜、竟後云何」。	美那、問 ^フ 云 ^フ 、「佛及 ^ビ 比丘僧 ^ヲ 請 ^シ 、何 ^ノ 時 ^ノ 。程遙 ^ク 輻 ^ヲ 來 ^シ 給 ^フ 不能 ^シ 」ト。
時富那奇、將兄美那、在高樓下、然香遙請。佛知其意、與諸聖衆、乘通而至、入就舍坐。美那便以種種美膳、奉佛及僧。食訖已竟、佛爲說法。舉國人民、合家大小、盡得道跡。	其 ^ノ 時 ^ニ 、富那奇、美那 ^ト 共 ^ニ 高樓 ^ノ 昇 ^リ 香 ^ヲ 燒 ^テ 遙 ^ク 佛 ^ノ 御方 ^ニ 向 ^テ 佛 ^ヲ 請 ^シ 奉 ^ル 。佛、空 ^ニ 其 ^ノ 心 ^ヲ 知 ^リ 給 ^フ 、諸 ^ノ 御弟子等 ^ヲ 引 ^リ 具 ^ヲ 神通 ^ヲ 乘 ^リ 來 ^シ 給 ^フ 、金 ^ノ 床 ^ニ 坐 ^シ 給 ^フ 。然 ^レ 美那、美那、種々 ^ニ 飲食 ^ヲ 以 ^テ 佛及 ^ビ 比丘僧 ^ヲ 供養 ^シ 奉 ^ル 。食畢後、佛、爲 ^シ 法 ^ヲ 說 ^ク 給 ^フ 。國 ^ノ 人民 ^ヲ 舉 ^テ 來 ^シ 、家 ^ノ 上下 ^ノ 男女、皆、法 ^ヲ 聞 ^キ 道 ^ヲ 得 ^ル 。
阿難見已、長跪白佛、「此富那奇、宿種何罪、屬他爲奴。復作何福、遇佛得度」。	其 ^ノ 時 ^ニ 、阿難、此 ^ノ 見 ^テ 佛 ^ノ 白 ^シ 言 ^フ 、「此 ^ノ 富那奇、昔 ^ニ 何 ^ノ 罪 ^ヲ 造 ^リ 、今、人 ^ニ 隨 ^テ 奴 ^ト 成 ^リ 、又 ^ニ 何 ^ノ 福 ^ヲ 殖 ^シ 、佛 ^ニ 值 ^テ 奉 ^テ 道 ^ヲ 得 ^ル 」ト。
佛告阿難、「乃往過去、迦葉佛時、有一長者。爲僧造寺、四事供養、一切無乏。」	佛、阿難 ^ニ 告 ^シ 宣 ^フ 、「乃往過去 ^ニ 迦葉佛 ^ノ 時 ^ニ 、一 ^ノ 長者有 ^リ 。比丘僧 ^ヲ 爲 ^シ 寺 ^ヲ 造 ^リ 飲食衣服、臥具醫藥 ^ヲ 四事 ^ヲ 以 ^テ 供養 ^シ 貧 ^ノ 事 ^ヲ 無 ^ク 」ト。
長者死後、無人檢校、衆僧罷散、寺舍荒壞、無有人住。長者有子、出家學道、見寺荒壞、教化檀越、復共修治。還有僧住、供養如故。	而 ^レ 長者死 ^ス 後、其 ^ノ 寺破 ^レ 荒 ^レ 人 ^ノ 不 ^レ 住 ^ス 、衆僧皆 ^テ 散 ^ラ 去 ^ル 。長者 ^ノ 子有 ^リ 。出家 ^{シテ} 道 ^ヲ 學 ^ブ 。名 ^ヲ 自在 ^ト 云 ^フ 。如此 ^ノ 寺 ^ノ 破 ^レ 荒 ^レ 見 ^テ 、諸 ^ノ 人 ^ヲ 勸 ^メ 寺 ^ヲ 脩治 ^シ 。其 ^ノ 時 ^ニ 、僧返 ^リ 住 ^シ 本 ^ノ 如 ^シ 也 ^ト 。
時有比丘、得阿羅漢、次直掃地、聚糞中庭、未及除棄。時長者子、爲僧自在。呵罵之曰、「今此比丘、如奴無異。雖知掃地、不能除糞」。	其 ^ノ 住 ^ス 僧 ^中 羅漢 ^ノ 比丘有 ^リ 、寺 ^ノ 庭 ^ニ 塵掃 ^テ 淨 ^ク 間、長者 ^ノ 子 ^ノ 比丘有 ^リ 、此 ^ノ 羅漢 ^ノ 比丘 ^ニ 故無 ^ク 罵言 ^ス 。
佛告阿難、昔長者子、自在比丘、今富那奇是。由罵聖人、比丘爲奴、五百世中、當作奴使。	昔 ^ニ 長者 ^ノ 子 ^ノ 比丘 ^ト 云 ^フ 、今 ^ニ 富那奇 ^ト 此 ^ト 也。羅漢 ^ノ 比丘 ^ノ 罵 ^リ 依 ^テ 、五百世 ^中 常 ^ニ 人 ^ニ 隨 ^テ 奴 ^ト 成 ^リ 也。
復由往昔、勸化衆人、修治寺舍、供養衆僧、償罪畢已、蒙佛得度。今此坐下、得道之者、皆是往昔、勸化之衆、共修福人。緣是果報、皆得度脫」。	又、昔 ^ニ 諸 ^ノ 人 ^ヲ 勸 ^メ 寺 ^ヲ 脩治 ^シ 故 ^ニ 、前 ^ノ 罪 ^ヲ 償 ^リ 畢 ^レ 後、我 ^ニ 值 ^テ 道 ^ヲ 得 ^ル 也。今又、此 ^ノ 座 ^ニ 有 ^リ 道 ^ヲ 得 ^ル 國 ^ノ 人民、家 ^ノ 上下 ^ノ 人 ^ノ 、皆、此 ^ノ 昔 ^ニ 勸 ^メ 得 ^ル 寺 ^ヲ 脩治 ^シ 人 ^ト 也 ^ト 說 ^ク 給 ^フ 語 ^ヲ 傳 ^ヘ ト云 ^フ 。

【表 4】

金藏論	今昔物語集
佛告比丘、「燈指、往昔生波羅捺國、爲大長者子。在外遊戲、闔乃歸家。打門而喚、無人來應。良久母來、與兒開戶。曠罵母言、「 <u>孿家攪展、賊來劫耶</u> 。何以無人與我開門」。	佛、比丘告宣、「燈指、昔波羅奈國生長者子。有。外遊夜至家返門扣、人無。不答。良久父母來門開。兒、至母罵。
以罵母業、死墮地獄、受苦無量。地獄罪畢、還生人中、餘殃不盡、受斯貧困。(中略)	母罵罪依、地獄墮苦受事無量也。地獄罪畢、今、人中生云、罪殃不盡、貧苦受。
以罵母故、從地獄出、得是貧窮、爲賊所劫攪展之類。	

【表 5】

今昔物語集	法苑珠林	賢愚經
今昔、舍衛國中一人長者有。家大富財寶無量也。一男子令生。其兒身金色。端生事、世並無。父母此見喜愛事無限。	昔佛在時、舍衛國中、有一長者。其家巨富、財寶無量、不可稱計。生一男兒。身體金色、端正少雙。父母見已、歡喜無量。	時此國中、有一長者。其家大富、財寶無數。生一男兒。身體金色。長者欣慶、即設施會、請諸相師、令占吉凶。時諸相師、抱兒看省、見其奇相、喜不自勝。
兒身金色。依名金天付。	因爲立字、名曰金天。	即爲立字、字旃越那提婆(寶買金天)。此兒福德、極爲純厚。

Abstract

The *Jinzanglun* and Japanese Short Story Literature

MOTOI Makiko

Assistant Professor, University of Tsukuba Graduate School of Humanities and Social Sciences

The *Jinzanglun* 金藏論 is an anthology of Buddhist texts which was compiled by Daoji 道紀 in the Northern Zhou Dynasty. It is gaining much academic attention across not only Japan, but also in East Asia, such as in China, Taiwan and Korea. This is because, contrary to previous thoughts that this text survived only in Japan, it has also been found and verified in the Dunhuang archives as well as in Korea.

This paper shows that studies concerning the *Jinzanglun* got underway initially with research concerning Japanese Buddhist literature such as the *Nihon-Ryoiki* 日本靈異記 and *Konjaku-Monogatari-shu* 今昔物語集. It also points out the influences of the *Jinzanglun* on the *Konjaku-Monogatari-shu*, one of the most famous and largest anthologies of short stories 説話 in Japan, with the help of the newly introduced copy preserved in the temple Beomeosa 梵魚寺. The Beomeosa text and the *Konjaku-Monogatari-shu*

provide valuable information concerning some of the other lost chapters. My presentation proposes several possibilities of reconstructing the lost chapters. This will help us to gain an overview of this important text.

Key Words: *Jinzanglun*, Korean texts, Japanese manuscripts, Japanese literary studies, *konjyak-umonogatari-shu*, Buddhist texts

2010년 5월 11일 투고
2010년 6월 9일 심사완료